九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

眠りと覚醒のあいだ：ゲーテ『親和力』のオティーリエの「断念」における自然

池田，紘一

https://doi.org/10.15017/2332580

出版情報：文學研究. 88, pp.51-70, 1991-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

眠りと覚醒のあいだ

――ゲーテ『親和力』のオティーリエの「断念」における自然――

池田紘一

オティーリエの断念の決意（Entschluß zum Entsagen）がいかなる性質のものであり、作品の本質にとっていかなる意味を有するものであるか、これが『親和力』解釈上の最も重要な、最も魅力的な、また最も解きがたい問題の一つであることは言を俟たない。ほとんど異口同音のように繰り返される「極めて謎めいた、不可解な、多義的な作品」という評語は、まず何よりも作品中の出来事に対する語り手の独得の距離のとり方、語りのイローニッシュな抑制、そのために生ずる一種の曖昧さ、いわば作品の文体的側面に起因すると思われるが、しかしその奥につねにオティーリエの存在が意識されていることは疑いえない。

『親和力』の受容と解釈の歴史において目立つのは、大抵の論者が一種の対立的思考から出発しているという事実である。本能と理性、自然の法則と倫理の法則、自然必然性と倫理的自由、一言で云えば、自然と精神の対立が前提されている。そしてまた、大抵の場合、議論は精神的・倫理的なものによるエレメンタールな自然の克服をめぐって展開されており、作品の意味するものがたとえばカント・シラー的な意味での感性的自然必然性に対する人間的自由の勝利であるかどうか、あるいはまた、デモーニッシュな情熱と運命の力に対して辛うじてかちえられる精神の悲劇

的勝利、犠牲を払ってのみかちえられる、ただ彼岸においてのみ成就可能な真実の愛の勝利であるかどうか、そこに関心が集中しているように思われる。むろん力点は多くの場合、精神による自然の克服に置かれている。しかもそれは大抵オティーリエについて、オティーリエの断念について云われている。けれどもオティーリエの断念をそう云い切るには種々の難点がある。第一に、作中のオティーリエは頗る寡黙な上に、語り手のオティーリエに関する描写、特にその内面に関する描写はシャルロッテやエードゥアルトのそれにくらべるまでもなく、「日記」を別にすれば、極端に少なく、いわば証拠に乏しい。第二に、断念したのちのオティーリエとエードゥアルトのあいだに見られるいわゆる「ほとんど魔術的な牽引力」fast magische Anziehungskraft が筋の通った理解を妨げる。第三に、オティーリエは全体として甚だ謎めいていて一義的に解釈することが困難である。そういうわけでまた、多くの論者が、たとい倫理的精神による自然の克服を云う場合でも、そこにいろいろと留保を付すか、克服の微妙な性格、すなわち、オティーリエの愛と断念における自然と倫理的精神との確執の微妙な性格を縷々説明することに筆をついやすか、あるいは、オティーリエはエードゥアルトとの結合は断念したがエードゥアルトへの愛は断念していないというふうに断念そのものを二つに分けて考えるか、いずれにしてもそれを決して単純に割り切って考えているわけではない。しかし、たとい精神と自然との錯綜した関係を考慮に入れている場合でも、特にドイツ語圏や欧米の研究者の解釈においては、精神と自然との対立が余りにも強く、余りにも自明のこととして前提されており、まず最初に理念的・哲学的な二元論的対立の図式があってその観点から作品が見られているような印象を受ける。そしてその根本には、精神だけが人間であるという近代的意識が陋固として支配しているように思われる。

本稿は、『親和力』論の緒として、オティーリエの断念の過程に見られる一見目立たない、しかし極めて重要だと思われる若干のテクスト上の特徴、とりわけ、オティーリエの断念の決意がどのように、いかなる心の状態において生ずるかに着目し、ゲーテがオティーリエの内なる自然にいかに微妙な、意味深い、独自の性格を賦与しているかを

検討し、この問題をやや別の角度から考えて見ることによって、『親和力』における自然の新たな解釈の可能性を探ろうとするものである。その際、考察はもっぱら、エードゥアルトの旅立ち以降の、つまり第一部の最後の二章（第十七・十八章）と第二部の、語り手によるオティーリエの描写とオティーリエ自身の発言とにかぎられる。オティーリエの「日記」は、この人物を理解する上でも、小説全体の意味を考える上でも極めて重要な意義を有すると想像されるが、ここでは度外視する。日記に見られるオティーリエの思索と観察とを、恣意的な取捨をほどこすことなく全体として、物語の流れにおけるオティーリエの行動と発言とに矛盾なく、かつ意味深く結びつけることは、目下のところ筆者の力を超えているからで、これは別稿にゆずらざるをえない。

*

第二部第十七章、小説全体の終わりから二番目の章にこういう箇所がある。オティーリエが頑なに沈黙を守り、食べ物も飲み物もほとんど口にしないので、シャルロッテとエードゥアルト、それにいまは少佐に昇進している大尉の三人がこれをたいへん心配し、何とかオティーリエに態度を変えさせようといろいろ気を揉む。これに対してオティーリエは、友人たちへの手紙（「オティーリエから友人たちへ」）という形で、これを最後として、自分の断念の気持と沈黙の決意とをきっぱり表明する。

[...] Ganz rein war mein Vorsatz, Eduarden zu entsagen, mich von ihm zu entfernen. Ihm hofft ich nicht wieder zu begegnen. Es ist anders geworden; er stand selbst gegen seinen eigenen Willen vor mir. Mein Versprechen, mich mit ihm in keine Unterredung einzulassen, habe ich vielleicht zu buchstäblich genommen und gedeutet. *Nach Gefühl und Gewissen des Augenblicks* schwieg ich, verstummt ich vor dem Freunde, und nun habe ich

nichts mehr zu sagen. Ein strenges Ordensgelübde, welches den, der es *mit Überlegung* eingeht, vielleicht unbequem ängstiget, habe ich *zufällig, vom Gefühl gedrungen*, über mich genommen. Laßt mich darin beharren, solange *mir das Herz* gebietet. [...] Dringt nicht in mich, daß ich reden, daß ich mehr Speise und Trank genießen soll, als ich höchstens bedarf. [...] *mein Innres* überlaßt mir selbst! (Hamburger Ausg. Bd. 6, S. 477. 以下 H 477 もしくはH四七七と工合に表示。イタリック体は引用者による。以下同じ。)

エードゥアルトを諦めよう、エードゥアルトに近づくまいという私の決心は、まったく純粋なものでした。二度とふたたび会うことのないように願っていました。ところが事態は私の願いとは別な方向をたどり、エードゥアルトは自分の意志に反してまでも私の目の前に現れる結果になりました。エードゥアルトとは金輪際口をきかないという約束を、あるいは文字通りに受け取り、文字通りに解しすぎたのかも知れません。私はあのときエードゥアルトを前にして、咄嗟の感情と良心に従って口をとざし、沈黙したのです。そしていまさら何を申し上げることがありましょう。厳しい修道の誓いは、よくよく考えた末にこれを立てる人には落ち着かない不安な思いをさせるでしょうが、私は、偶然に、感情に衝き動かされて、この誓いをわが身に引き受けたのです。私の心の命ずるあいだは、この誓いを守らせてください。[中略] 無理にしゃべらせたり、必要最小限以上の飲み物や食べ物を摂らせたりするようなまねはやめてください。[中略] 私の心の中のことは、私自身におまかせください。

つまり、まったく思いがけずも姿を現したエードゥアルトを前にして自分の断念の決心を貫くために沈黙したのは、「偶然」zufällig、「咄嗟の感情と良心に従って」nach Gefühl und Gewissen des Augenblicks、「感情に衝き動かされて」vom Gefühl gedrungen そうしたのであって、「よくよく考えた末」mit Überlegung のことではないというのであ

る。だから、自分の誓いが自分に不安な気持を、迷いをおこさせることはないというのである。そして「私の心」mir das Herz が命じているのであるから、そのあいだは「私の心の中」mein Innres のことには干渉するなというのである。一見すると、ここにはやや辻褄の合わないところがあるように思われる。常識的論理からすると筋が通っていないように思われる。オティーリエの沈黙が、偶然、感情にかられたものではなく、よくよく考えた末の、つまり熟考の結果だというなら辻褄が合う。それなら、それが彼女を不安にすることはないであろう。ここではそれが逆になっている。けれども、オティーリエのこの一見矛盾したことばは、彼女の断念の決意が、従ってまた沈黙の決意が、たとえばシャルロッテのそれのように極めて意識的・自覚的な、理性的・倫理的な思慮に発したものではなく、精神というよりもむしろより多く彼女の自然に属している何か別のものに発しているのだということ、そして、それだからこそ却ってゆるぎないものであるということを暗示しているのではあるまいか。真の信仰が、おそらくは霊感にうたれて魂の深層から突如として湧き上がるように、あるいは精神の論理を突破したところ、超えたところで生まれるように（「不合理ゆえにわれ信ず」）、オティーリエの決意も精神的・倫理的反省とは別の秩序において生じているのだということである。しかもこの特徴は、この箇所のみならず、オティーリエの断念の決意に至る決定的な局面のいずれにおいても認めることができる。

オティーリエの最終的な断念の決意はもともとすでに第十四章において、すなわち赤ん坊の水死という小説の大きな転換点においてなされたものであった。この箇所はしばしば引用されるところであるが、シャルロッテがソファーに腰を掛けている。オティーリエは頭だけをシャルロッテの膝にうずめ、気を失って床に横たわっている。この状態で、これまでエードゥアルトとの新たな結びつきへの希望を捨て切れないでいたシャルロッテは、赤ん坊の溺死という事実を経験したいま初めて、少佐に向かって、エードゥアルトとの離婚に同意する旨を表明する。自分は離婚に同意する。ほんとうならもっと早く決心すべきであった。いたずらに躊躇し、抗ったためにみすみす子供を殺してしま

った。「ある種のことについては、運命はいったんやるときめたらやり通すのです。理性、美徳、義務、その他どんな神聖なものをもってしてもこれを邪魔だてすることは」できない。「どうか、まどろんでいるこのかわいそうな子を見てやってください。この子が半ば死んだような昏睡から覚めて意識をとりもどす瞬間のことを思うとふるえがきます。世にも不思議な偶然に操られてエードゥアルトから奪ったものを、エードゥアルトへの愛によって償えるという希望をなくしてしまったら、この子はどうやって生きていけばいいのでしょう。どこに慰めを求めればいいのでしょう。」（H四六〇ー四六一）それゆえシャルロッテは、エードゥアルトとの離婚に同意するというのである。少佐が立ち去ったあとで正気をとりもどしたオティーリエはシャルロッテに対してどう云うであろうか。

[...] zum zweitenmal widerfährt mir dasselbige. [...] Kurz nach meiner Mutter Tode, als ein kleines Kind, hatte ich meinen Schemel an dich gerückt; du saßest auf dem Sofa wie jetzt; *mein Haupt lag auf deinen Knieen, ich schlief nicht, ich wachte nicht; ich schlummerte. Ich vernahm alles,* was um mich vorging, besonders alle Reden *sehr deutlich* [...] (H 462)

二度も同じことを経験しました。[中略] 母が死んで間もなく、私が小さい子供だった頃、自分の低い腰掛けをおばさまのそばにずり寄せたことがあります。おばさまはいまと同じようにソファーに腰をおろしていらして、わたしは頭をおばさまの膝にうずめて、眠っているのでもなく、目覚めているのでもなく、夢うつつの状態でした。まわりの物音はみな聴こえました。特に話し声は、みな非常にはっきりと聴きとれました。

自分はこの状態で、自分の置かれている孤児としての境遇についてシャルロッテが誰か知り合いの女性に話している

事柄をはっきり聴き取り、シャルロッテが自分に何を求めているかを正確に理解し、シャルロッテの家に引き取られるまで、そして引き取られたのちもしばらくのあいだ、それを信条として生きてきた。しかし、自分はその軌道を踏みはずした。そして赤ん坊の水死という恐ろしい出来事を体験したあとで、シャルロッテはふたたび、前のときよりもいっそう惨めな自分の状態に対して自分の目を開いてくれた。

Auf deinem Schoße ruhend, halb erstarrt, wie aus einer fremden Welt vernehm ich abermals deine leise Stimme über meinem Ohr [...] wie damals habe ich auch diesmal *in meinem halben Totenschlaf* mir meine neue Bahn vorgezeichnet. / *Ich bin entschlossen* [...] *Eduards werd ich nie!* Auf eine schreckliche Weise hat Gott mir die Augen geöffnet, in welchem Verbrechen ich befangen bin. Ich will es büßen; und *niemand gedenke mich von meinem Vorsatz abzubringen!* (H 462-463)

おばさまのお膝にやすらいながら、なかば麻痺した状態で、遠い世界からきこえてくるように、またもやおばさまのひそかな声を耳の上に聴いたのです。[中略] あのときと同じように今度もまた半ば昏睡状態で、私がこれから生きていくべき新たな道を定めました。／私はきっぱり心に決めました。[中略] 決してエードゥアルトのものにはなりません。神さまは恐ろしいやり方で私の目を開き、私がどんな罪に陥っているかをはっきり教えてくださいました。私はこの罪を償いたいと思います。私のこの決心を変えさせようなどとは、ゆめお考えになりませんように。

ここでオティーリエが口にしている断念の決意はまったく曇りのない、いわば意識的・自覚的な、断固たるものであ

り、理性的で、倫理的である。しかしそれは、いかなる心の状態において生じたのであろうか。オティーリエはおそらくかつてのようにシャルロッテの「ひそやかな声」を「非常にはっきり」sehr deutlich 耳の上に聴く。しかしまた、かつての母親の死の際と同じように「半ば麻痺した状態で」halb erstarrt、「眠っているのでも、目覚めているのでもない、夢うつつの状態で」ich schlief nicht, ich wachte nicht; ich schlummerte、「半ば昏睡状態で」im halben Totenschlaf、シャルロッテの声を聴き、この状態で明瞭な、断固たる決意を行うのである。この半眠半覚の状態は、人間において精神と自然とがまだ確然と分かたれていない、両者が何らかのかたちで融合している中間状態、むしろどちらかと言えば自然に近い状態を暗示してはいないであろうか。そして「遠い世界からきこえてくるように」wie aus einer fremden Welt ということばは、「魂の深層からきこえてくるように」wie aus einer tieferen Seelensphäre というように響きはしないであろうか。さらにまた「おばさまのお膝にやすらいながら」auf deinem Schoß ruhend ということばは、「母なる自然の懐に抱かれて」auf dem Schoße der Mutter Natur ruhend というふうに響きはしないであろうか。むろん、純内容的に見れば、幼時の母親の死の際もいまの場合も、シャルロッテの声を聴いて悟るというのは何を意味するかということが問題になるであろう。二つの決意がともに最も近しい者の死（母の死とほとんど実の子供といってもよい赤ん坊の死）に誘発されているのはいかなる意味かと問いたくもなるであろう。さらには、神が罪に対して目を開いてくれた、その罪を償いたいというところにやや宗教的な匂いを嗅ぎつけたくもなるであろう。それらはそれぞれ重要な問題ではあるが、しかしここで肝腎な点は、そういう内容的なもろもろの要因によって惹き起こされる決意が、どのような心の状態で、どんな工合に生ずるかということである。しかも、内容的な要因の曖昧性、多義性にくらべれば、これはかなりの確実性、信憑性を有する。すなわち、半眠半覚の状態で、すべてを明瞭に聴きとりながら、曇りなき断固たる決意に至るということである。

ところでこの、第十四章における決定的な断念の決意の箇所は、われわれにある別の箇所、第八章末尾の、オテ

ィーリエがある意味では断念の決意とはまったく正反対に、強い孤独感に悩まされながらもエードゥアルトとの「深い結びつき」das innigste Verhältnis に対するそれ以上に強い確信を抱く箇所を想い起こさせる。けれども、この箇所の意義、と同時に上に触れた二つの箇所の意義を充全に測りうるためには、断念の過程をその初期の段階から簡単に辿ってみる必要がある。

*

断念の過程は徐々に、非常にゆっくりと、少しずつ順を追うように進む。湖のほとりでのオティーリエの誕生日の不吉な出来事（第一部第十五章）とエードゥアルトの旅立ち（第一部第十六章）のあと、オティーリエの別離の苦悩はかぎりなく、「疑惑と心配」に悩まされ、心のうちに「無限の空虚」eine unendliche Leere（H 351）を感ずる。にも拘らず「オティーリエはエードゥアルトを決して諦めていたわけではなかった」Ottilie hatte Eduarden nicht entsagt（H 351）。オティーリエはあらゆるものに「エードゥアルトがやがて帰ってくるかどうかの兆候」しか見ず、農民の子供たちの行列行進の練習も彼女には「やがて帰ってくる館の主人を迎えるための歓迎パレード」としか思われない。夜は、誕生日にエードゥアルトから贈られたトランクの中身をあかず眺め、昼は昼で、ひとり戸外に散策し、湖で小舟に乗り、遠い異国の地に想いをはせ、そこに彼女はつねにエードゥアルトの姿を見出す。「彼女はいまなお彼の心に寄り添い、彼は彼女の心に寄り添っていたのである」seinem Herzen war sie noch immer nah geblieben, er dem ihrigen（H 351）。これが第十七章の末尾である。しかし、シャルロッテの妊娠の事実を聞き知ったオティーリエは驚き、狼狽し、自分の内部に引き籠もる。「希望をもつことはできなかったし、願うことはゆるされなかった」Hoffen konnte sie nicht, und wünschen durfte sie nicht（H 359）。このやや含みの多い表現で第一部は終わっている。

第二部に入ると、建築家が登場し、シャルロッテの娘のルチアーネが登場し、筋の展開を引き延ばすいわゆるレタ

ルディーレントな要素が前面に出てくる。墓地の整理、古い礼拝堂の修復、騒々しい社交の営み、それに伴う細々した出来事の描写が延々とつづき、オティーリエは一見背景に退いたかに見え、その内面に関する描写は極度に乏しくなる。けれども、そういうくさぐさの出来事を語りながら、語り手はまるで事のついででもあるかのように、また、ときにはいささか唐突に、オティーリエのエードゥアルトに対する気持ちをわれわれに打ち明ける。それはほとんど聴きとれるか聴きとれない程度にいつも響いている基底音のようにも聴こえるし、また、深い水底から突然水面に浮かび出たというふうにも感ぜられる。たとえば、修復の成った修道院でオティーリエが、自分が存在していると同時に存在していないかのような、まさに半眠半覚の状態を想わせる一種の自己喪失の体験を味わう一件を語ったあと、語り手は、この体験の日が特別の日に当たっていたことをオティーリエははっきり自覚していたと語り、そこからオティーリエのエードゥアルトへの想いを紡ぎ出す。オティーリエはエードゥアルトの誕生日を祝うべく丹精こめて育てられたアスターの花が空しく咲き乱れるのを慨嘆し、自分の誕生日を祝った花火の炸裂音を想像裡にふたたび聴く。そしてこうつづく。「オティーリエの孤独はそれだけいっそう深まった。もはやエードゥアルトの腕によりかかっているわけでもなかったし、またいつの日かその腕にささえてもらえるという希望もなかった」（第三章・H二七四）。

墓地や修道院とのかかわり、建築家に見せられた古代の蒐集物の印象などに誘発されて深まった孤独感、絶望感、無常感にも拘らず、また、エードゥアルトが戦争の運命に身をゆだねたことを知って襲われた衝撃と狼狽にも拘らず、オティーリエの心の奥深くに場を占めているのは依然としてエードゥアルトであり、エードゥアルトなしには何一つ意味をもたない。それゆえまた、たとえば、オティーリエの建築家に対する個人的関係に言及されたところで、「彼女の心にはもはや少しの余地も残っていなかった。エードゥアルトへの愛にまったく占有されていたからである」と語られる（第五章。H三九〇）。あるいは、いまは晴れて結婚できる状態におかれて再度館を訪問した伯爵と男爵夫人のことに触れながら、語り手は、まさに事のついでのように、「当時はまだまったく希望のもてなかった二人が、

いまは願っていた幸福を間近にひかえてオティーリエの前に立っていた。これを見て彼女の胸からは、思わず知らず嘆息がもれた」と語る（第五章。H三九〇）。あるいはまた助教師がシャルロッテとオティーリエを前に、オティーリエは暫くのあいだ寄宿学校に戻って世間にいては断片的にしか分からず頭を混乱させるだけの事柄を一つの関聯において徹底的に学ぶのがよかろうと助言する場面を描写しながら、語り手は、オティーリエにとっては「愛している人を想っているかぎりこの世に関聯のないものがあろうなどとは思われなかったし、愛している人なしに何かが関聯しうるなどということは理解できなかった」と語る（第七章・H四一四）。

かくして、基底音としてのオティーリエのエードゥアルトへの愛、オティーリエの内面描写がときおり表面に浮上しながら、延々と第七章まで進んできたところで、例の第八章末尾の決定的な箇所に至るのである。オティーリエは赤ん坊の洗礼の際に老牧師が急死したことで、誕生と死を同時に体験し、うつろいやすさ、はかなさ、離別などの想念にとらわれることが多くなる。けれども夜になって床につくと「不思議な夜の幻影」wundersame nächtliche Erscheinungen が現れ、愛するエードゥアルトの生存を保証するとともに、自分自身の存在も生きいきと元気づけられるように感ぜられ、オティーリエは深い慰めを得る。

> Wenn sie sich abends zur Ruhe gelegt und im süßen Gefühl noch *zwischen Schlaf und Wachen schwebte*, schien es ihr, als wenn sie in einen ganz hellen, doch mild erleuchteten Raum hinneinblickte. In diesem sah sie Eduarden *ganz deutlich* [...] jedesmal in einer anderen Stellung, die aber *vollkommen natürlich* war und *nichts Phantastisches* an sich hatte: stehend, gehend, liegend, reitend. Die Gestalt, *bis aufs kleinste ausgemalt*, bewegte sich *willig* vor ihr, *ohne daß sie das mindeste dazu tat, ohne daß sie wollte oder die Einbildungskraft anstrengte.* [...] so war sie *erquickt, getröstet*; sie fühlte sich überzeugt, Eduard lebe noch, sie stehe mit ihm noch *in dem innigsten Verhältnis.* (H 422-423)

夜になって床につき、甘美な感情にひたりながらまだ眠りと覚醒のあいだを漂っていると、彼女はきまって、とても明るい、とはいえやわらかい光に照らしだされた部屋を覗きこんでいるような気がした。そこに彼女はエードゥアルトの姿を非常にはっきりと見た。[中略] 立っていたり、歩いていたり、横になっていたり、馬に乗っていたり、見るたびに姿勢は異なっていたが、しかしそれはみなまったく自然で、空想めいたところは微塵もなかった。その姿は、微細な点にいたるまで鮮明で、こちらが何もしないのに、望みもしなければ、想像力をはたらかせもしないのに、彼女の前でひとりでに動くのであった。[中略] こうして彼女は元気づけられ、慰められて、エードゥアルトはまだ生きている、自分はまだエードゥアルトと深く結びついているという確信を覚えたのである。

ここでもすべては、先に引いた第十四章の、シャルロッテの膝に頭をもたせて断念を決意する場合とまったく同様に、「眠りと覚醒のあいだで」zwischen Schlaf und Wachen、眠りつつ目覚めている、目覚めつつ眠っている状態、半眠半覚の状態で生じている。そして、それにも拘らず、幻影の中に現れるエードゥアルトの姿も動きも、一切は、「非常にはっきり」ganz deutlich、「まったく自然で」vollkommen natürlich、「微細な点にいたるまで鮮明で」bis aufs kleinste ausgemalt、「空想的なところは微塵もない」nichts Phantastisches。たしかに「見る」と「聴く」の違いはあるが、この点も断念の決意の場合にすべてを「非常にはっきり」聴きとるのとまったく同じである。ここにおいて、この幻影においてはたらいているのは、精神であろうか、それとも自然であろうか。少なくとも精神的な意志、精神的な恣意がはたらいていないのは明らかであろう。なぜなら、見られた姿は意志や想像力のはたらきかけなしに、「こちらが何もしないのに、望みもしなければ、想像力をはたらかせもしないのに」オティーリエの前で「ひとりで

に」willig 動くのであるから。これは精神の現象というよりも、むしろ感性的・生理的現象、一種の内的自然現象、あるいは、精神と自然の対立を超えた領域、いわば魂の深層における現象と呼びうるものではあるまいか。いずれにしても、まさにこのような心の状態でオティーリエは、第八章のこの箇所ではエードゥアルトとの「深い結びつき」das innigste Verhältnis をはっきり確信し、第十四章のシャルロッテの膝のなかでは断念の決意をはっきりと固めるのである。

*

ところで、この二つの箇所に注目するのは、むろんまず第一に、両者に見られるオティーリエの心的状態の共通性と、そこで生ずる対照的な結果、断念の決意と愛の確信というコントラストのゆえであるが、そればかりではなく第二に、小説全体の構造に占める両者の特別の位置、とりわけエードゥアルトと離れたのちのオティーリエの断念の過程における特別の位置のゆえである。第一部が、エードゥアルト、シャルロッテ、大尉、オティーリエという四人の人物の、いわゆる「親和力」による愛の交錯を取り扱っているのに対して、第二部の核心がこの断念の過程にあることは疑いを容れない。「不思議な夜の幻影」の箇所は第八章の、しかもその末尾に位置している。この箇所は、いわば第二部の第一部、正確には第一部第十七章から第二部第八章までの部分におけるオティーリエの魂の歩み、心の変遷を締め括っているのである。そしてそのあと、いわば第二部の第二部が始まる。事実われわれは、第九章の幕開きとともに何かが新しく始まるという印象を受ける。第八章と第九章とのあいだに大きな休止が置かれ、また新たな楽章が響き始めるかのような印象を受ける（一見そう感じられるこの印象のより深い意味については後述する）。第九章から物語は、もはやさほど多くのレタルディーレントな要素を介入させることなく、最初はゆっくりと、徐々にテンポを速めながら、オティーリエの断念のプロセスに集中してゆく。そこで何が起こるか、特にオティーリエの心の

中で何が生起するか、これについてはここでは立ち入らないが、いずれにしても一切は、湖のほとりでのオティーリエのエードゥアルトとの厄い多き予期せざる再会と子供の溺死へと収斂してゆく。再会の喜びと現実に対する分別とのあいだで揺れ動きながら、オティーリエは強く抱きしめるエードゥアルトに自らも腕をからませ、「やさしい情愛をこめてエードゥアルトをわが胸に抱きしめた。希望が天から落ちる流れ星のように一瞬ふたりの頭上をよぎった。互いに結ばれたと思い、またそう信じたふたりは、はじめて思い切り、心ゆくまで接吻をかわし、離れがたい思いを振り切るようにして分かれた。」この直後、オティーリエの動揺と心の乱れが原因となって、赤ん坊が水に溺れて死ぬ。そして、第十四章の半眠半覚の状態での断念の決意の箇所になる。オティーリエは将来教師の職につくために、寄宿学校に戻ることに同意する。その旅の途上、旅館の一室での運命の偶然によるエードゥアルトとの不意の出会いという事件に遭遇して、オティーリエは沈黙と飲食物の拒絶を決意し、この決意と同時に館への帰還に同意し、そして、最初に引用した手紙、旅館での再会の際の偶然の、感情にかられた、咄嗟の沈黙の決意に関する、「オティーリエから友人たちへ」の手紙に至るのである。

すなわち、小説構造におけるこのような位置からも明らかなように、上にやや詳しく触れた都合三つの箇所は、断念のプロセスの最も決定的な瞬間に、オティーリエの魂に何がどのように生じたかを示しているのである。けれども、その際最も重要なことは、オティーリエの絶対的な愛の確信と断念の決意とが、彼女の魂のまったく同一の平面、まったく同一の層で生ずるということである。繰り返せば、それがともに、自然に極めて近い領域、精神と自然との中間領域、もしくは精神と自然との対立を超えたいわば第三の領域で、「眠りと覚醒のあいだ」で、眠りつつ目覚め目覚めつつ眠っている状態で、最後の沈黙の決断の場合は「偶然」に、咄嗟の「感情」にかられて生ずるということ、しかもそれがつねに非常にはっきりとした形をとって、明瞭に、確固たるものとして生ずるということである。この事実は何を意味しているのであろうか。それは、エードゥアルトに対する絶対的な愛、「深い結びつき」から、最終

的な断念の決意に至るオティーリエの心の変化、魂の推移が、不断の、連続的なプロセスであることを暗示しているのではないだろうか。たしかにこのプロセスには高まりが、一種の「高昇」Steigerung が認められる。そのテンポは彼女の経験する種々の出来事によって遅くされたり早められたりする。赤ん坊の溺死や旅館での不意の出会いの際に見られるように、ほとんど劇的ともいえる飛躍をとげるように見える場合さえある。湖畔での再会に見られるように、一瞬愛の成就を信じるような事態さえ起こる。しかし、これらはオティーリエの魂が外界とぶつかって形づくる、いわば表層の軌跡であって、その根柢には、高昇しつつも一貫した、不断の、連続的なプロセスが地下水のように流れているのではあるまいか。表層の軌跡が無意味だというのではない。それこそまさに人生の軌跡、精神的存在として人間が刻む軌跡なのだから。それはオティーリエにとってもむろん重要なものである。ただ、オティーリエという形姿を極めて独特なものにしているのは、そういう表層の底にある魂のこの不断のプロセスではないかということである。このプロセスは、小説のはじめの方で助教師がオティーリエを評して云うことば、「いつも同じ足どりで、ゆっくり、ゆっくり前進する、が、決して後戻りしない」immer gleichen Schritts gehen, langsam, langsam vorwärts, nie zurück (H 264) を想い起こさせる。そしてこの事実は、甚だ逆説的ではあるが、オティーリエの断念の決意がある意味では、精神による倫理的反省としてではなく、愛の確信、「深い結びつき」の確信の中から、愛の確信が生じたその同じ魂の深層において、その深層のある種の秩序に逆って紡ぎだされたのではないかということを予想せしめるのである。

このように予想するとき、われわれは、もう一箇所、一見唐突でもあり、謎めいてもいる箇所に注意を向けたくなる。オティーリエは実は、これまで引いた箇所以外でも、もう一度だけはっきり断念の決意をしているのである。いや断念できたと信じてさえいるのである。それは「深い結びつき」の確信で終る第八章のつぎの章、休止ののちに新たな楽章の開始を告げるかのように、「春になっていた」で始まる第九章でのことである。季節が一巡してふたたび

辺りが緑に萌え染める春が訪れる。オティーリエはエードゥアルトの子供を抱いて、若い灌木や植物のあいだを散歩している。彼女は、豊かな自然環境に恵まれた子供の幸せな将来に思いをはせ、その上この子供が父親と母親が揃ったその目の前で成長し、新たに結ばれたたのしい絆の証しになればどんなに素晴らしいだろうと考える。

Unter diesem klaren Himmel, bei diesem hellen Sonnenschein *ward es ihr auf einmal klar, daß ihre Liebe, um sich zu vollenden, völlig uneigennützig werden müsse*; ja in manchen Augenblicken glaubte sie diese Höhe schon erreicht zu haben. Sie wünschte nur das Wohl ihres Freundes, *sie glaubte sich fähig, ihm zu entsagen, sogar ihn niemals wiederzusehen*, wenn sie ihn nur glücklich wisse. Aber ganz entschieden war sie für sich, niemals einem andern anzugehören. (H 425)

この明るい空のもとで、この明るい日ざしのもとで、彼女には突然、自分の愛が完成するためには完全に己れをすてた愛にならなければならないということが、はっきりした。いや、そういう高みにすでに達していると信じる瞬間すらあった。彼女はエードゥアルトの幸福しか願わなかった。エードゥアルトが幸せであることが分かってさえいれば自分には彼を諦めることができる、いや二度とふたたび会わずにいることさえできると思った。しかし自分は決して他の誰のものにもなるまいとはっきり心に決めていた。

これは物語全体を通して初めて断念の決意について言及された箇所である。この決意の描写には多少イローニッシュな響きがないでもないが、「突然……はっきりした」のは、必ずしも春の緑の素晴らしさと、子供と、明るい日の光とによる一時的感激のせいではあるまい。しかし、そうでないとすれば、これはそれまでの物語の展開からいって、

まことに唐突だという気がする。すでに触れたように、第八章までの経過を見るかぎり、たといどれほど孤独と無常感にさいなまれていても、またさまざまの経験を通じてたといどれほど死への親近感を覚えていたとしても、オティーリエの愛慕の念は却って募るばかりで、それを集約するかのように「不思議な夜の幻影」が第八章末尾に置かれていたのであった。そしてこの断念の決意なのである。けれどもこの断念は、まさに「深い結びつき」の確信そのものの中から生まれ出たのではあるまいか。それは同じものの別の側面、別の現れではないだろうか。従って、第八章と第九章とのあいだにわれわれが感ずる大きな休止のごときものは、時間的な意味での休止、たとえば、そこにかなり長い時間が置かれていてその時の経過が省かれているために感ぜられる休止といったものではない。エードゥアルトとの長い離別という内面的経験の中で、同時に外の現実を経験しつつ、オティーリエの愛は次第に熟成し、純化し、内面化し、魂の奥深くますます深く沈潜し、かくして「深い結びつき」の確信に達したところで、その深みから、いわばそのはらからとして、ある種の必然性をもって断念の決意が生ずるのである。それゆえにこの休止は、時間的な休止ではなく、質的な休止であり、第八章と第九章とはこの意味では連続しているのである。それだけに却って、この断念がオティーリエの意識面に浮かび上がったときには、また、物語の表層の文脈に現れたときには、唐突で謎めいて感ぜられるのではあるまいか。けれどもオティーリエの意識面に現れた気持は、ある真実を語っている。「自分の愛が完成されるためには完全に己れをすてた愛にならなければならない」、この唐突と見える決意は――物語の表層ではその後数々の試煉にたえなければならないが――愛の確信と断念の決意とが一体のものであることを示して間然するところがない。因に、「オティーリエの日記」中の有名なことば、「その種において完全なものはその種を超えて、何か別のもの、類を絶したものにならなければならない」（H四二七）は、この第九章の末尾に見出される。

*

オティーリエの断念の決意は、表面上の有為転変にも拘らず、不断の過程の帰結である。すでに第八章までに十分に準備されていたもの、「深い結びつき」の確信と同時に胚胎していたもの、予感されていたものの顕現である。しかし、たとい内部から必然と連続によって生じてくるものではあっても、それが完全な形をとって現れるためには、その真実を見極めるためには、いわば外から襲いかかる運命の試煉を必要とする。すっかり決意が固まっていよいよ寄宿学校へ向かおうという矢先に偶然のいたずらによってエードゥアルトとふたたび出会うという試煉がそれである（第十六章）。エードゥアルトを前にして、テーブルの上から手紙を取り上げたオティーリエは、「顔色ひとつ変えずに」手紙を読みおえ、それを「そっと」押しやり、それから、胸の前に手を合わせ、こころもち前かがみになると、あの独特の懇願と拒絶の姿勢でエードゥアルトを見つめる。物語の表層から見れば、これは逃れられぬ運命との妥協とも映ずるであろう。けれども、おそらくこの瞬間にオティーリエは、はじめて、決定的に、あの真実、「深い結びつき」と断念との一致を悟るのである。まなざしが自己の魂の深層に透徹するのである。頭で理解するのではない、魂の底を見るのである。そして、そのまなざしの中で、「深い結びつき」と断念の一致として「沈黙」と「禁欲」の決意に至るのである。

オティーリエの断念の決意は、精神と自然の対立の意味における精神的・理性的・倫理的決断と見なすことはできない。精神による自然の克服でもなければ、まして精神の自然に対する勝利でもない。他方ではしかし、オティーリエのエードゥアルトへの愛は、単なる情熱（Leidenschaft）でもなければ、単なる自然必然性でもない。オティーリエはその断念の決意によって、一方では、単なる精神的・倫理的なものに対して（その最も形骸化した形態の一つは法的に制度としてのみ保証された結婚生活であろう）、他方では、単なる感性的・自然的なものに対して（これは部分的にはエードゥアルトに体現されている）、何ものかを守ろうとしたのである。それは「深い結びつき」と断念の

一致においてのみ辛うじて守りうる何ものか、おそらくは「親和力」による愛が真に含蓄するところの何ものかであろう。「断念」は、作中ではつねに「エードゥアルトを断念する」、あるいは「エードゥアルトのものにはならない」というようなやや曖昧な表現で云われているが、むろんこれは、単にエードゥアルトとの結婚の断念を意味しているのではあるまい。従ってまた、エードゥアルトとの結婚あるいは結合は断念したが、エードゥアルトへの愛は断念していないというのは、皮相な見方であると云わざるをえない。オティーリエの断念はやはり、エードゥアルトへの愛の断念なのである。「深い結びつき」と「断念」の一致としての「愛の断念」なのである。そしてこの逆説の中で、あの「ほとんど魔術的な牽引力」、真の親和力的愛が生ずる。この逆説、この親和力的愛はしかし、オティーリエの断念の決意がつねに自然と精神との中間状態、眠りと覚醒のあいだで生起したように、ただ沈黙と禁欲においてのみ可能なのである。なぜなら、沈黙とはまさに、ことば、ロゴス、すなわち精神の拒絶であり、飲食物を断つということは、まさに自然の拒絶にほかならないからである。

かくしてわれわれは、ゲーテがオティーリエの「断念」にいかに繊細な、深い意味を与えたかを知る。この断念を生ぜしめた魂の動き、あるいは魂の層をわれわれは何と名づけるべきであろうか。繰り返せば、それは精神と自然の対立の意味での精神でもなければ自然でもない。対立を超えた、あるいは対立の根柢にある何ものか、第三の何ものかである。それは、そもそもの初めにオティーリエの親和力的愛を生じさせ、それを「深い結びつき」としての真の親和力的愛へと純化し昇華することを可能にした何ものかである。これを適切に名指すことばをわれわれは持ち合わせないが、眠りと覚醒のあいだで生じ、オティーリエの親和力的愛と、そしてまた「深い結びつき」の確信と表裏一体をなし、それに連続しているという意味で、それはやはり内なる「自然」と呼んでしかるべきものであるまいか。精神と自然の対立は精神の側が生み出したものであって、この対立を包摂しているのは精神である。いわばそれとちょうど裏返しの意味で精神と自然の対立を包摂しているところの自然――ゲーテはオティーリエの愛と断念の一致の

うちにおそらくこのような自然を暗示し、それを通じて「自然」により根源的で豊かな生命を吹き込もうと、あるいは「自然」のためにより根源的で豊かな生命を取り戻そうとしたのであろう。この意味においてオティーリエの断念の決意は、ほとんど自然の自浄作用、自然の自然そのものによる自己克服と呼ぶことのできるものである。それはちょうど『色彩論』において、たとえば外に見る緑に対して深紅が内から、自ずから生じてくるように、あるいは『植物変態論』において、植物が自らに内在する自発的な形成衝動によって、その形成衝動が外界とぶつかって形態を生むことを通じて、内から生長していくように、内なる自然の内部から生じてくる。あるいはそれは、錬金術に云う「自然はただそれ自身の中で、それ自身を通してしか改善されない、あるいは誤りから解放されない」の意味で、同一のものの同一のものによる理解と克服と云いうるかもしれない。そしてそれは、通常の精神的・倫理的世界とは相容れないが、己れをよく知り、己れを己れの仕方で（自然を自然そのものの流儀で）克服するがゆえに、精神的・倫理的決断よりもより明瞭で、断固としており、ある意味ではより高次の倫理性に達する可能性を有しているのである。

付記　本稿は、一九九〇年十月六日九重高原において、ゲッティンゲン大学教授アルブレヒト・シェーネ氏を迎えて行われたゼミナール、および同年十一月二十七日鳥取大学において開かれた秋期日本独文学会で発表した内容に、若干の加筆修正をほどこしたものである。